法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-15

木下夕爾の文学とその背景(6)の補記 : 俳句における「挨拶句」をめぐって

岡田, 秀子

(出版者 / Publisher)
法政大学教養部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政大学教養部紀要. 人文科学編 / 法政大学教養部紀要. 人文科学編
(巻 / Volume)
100
(開始ページ / Start Page)
97
(終了ページ / End Page)
106
(発行年 / Year)
1997-02
(URL)
https://doi.org/10.15002/00004779

Hosei University Repository

木下夕爾の文学とその背景（六）の補記

――俳句における「挨拶句」をめぐって――

岡田秀子

一九八七年以来、五回にわたって木下夕爾の文学とその背景について書いて来た。

昭和十年代、中央にあって詩を書いた詩人たちにくらべ、止むを得ず地方にあって、孤絶したところで（日本共同体に抗しながら）近代詩を書きつづけた詩人たち（宮沢賢治、大手拓二、伊東静雄、中原中也など）のほうが、中央詩壇で活躍した詩人より、詩作においてよりラディカルであることに注目したためである。しかし、木下夕爾には前掲の詩人たちのようなラディカルな面は、容易には見えず、その詩だけが新鮮さを失わずに温雅な姿を保ちつづけるのである。この秘密は何なのか。この問をとうことは西欧受容が夕爾の詩や句の表現の裏がわでどのようになされたかを探ることでもある。以下の文章はその序章である。

それは誰もが辿るべき道順であろうが、ことに私は自分の俳句と詩の摩擦にくるしんだ。私の場合両者の世界にあまり逕庭がない故だろう。私の詩は殆ど全部が多くの言葉をついやさなくても、そのまま一七文字に圧縮できる可能性があった。

（「福山雑記(1)」『わが詩・わが旅』）

安西冬衛の処女詩集『軍艦茉莉』が東京で刊行され、詩壇で最も評判の高い詩集となったのが一九二九年四月。

Hosei University Repository

この四年後の一九三三年一月には第二詩集『亜細亜の鹹湖』、四月には第三詩集『渇ける神』が刊行され、安西の詩壇における位置は三十代半ばで早くも確固としたものになろうとしていた。夕爾が第一早稲田高等学院（仏文）に入学、実兄卓司（当時医学生）と自炊生活をしながら「若草」の投稿者を糾合し「第二次文学」を創刊したのが一九二九年であるから安西の詩の影響下に詩作していたと考えてもいいだろう。夕爾はこのほぼ二十年後、俳誌「春灯」に「俳句を如何に詩の如く書くか、詩を俳句のごとく如何に完璧に書くか、というような動きが田舎の中学生であった私にもおぼろげながら眺められた」と述べて、当時、自分の心にひびいた作品として安西冬衛の詩集『軍艦茉莉』のなかの「春」をあげている。

春

てふてふが一匹韃靼海峡を渡って行った

安住冬衛のこの詩については、清岡卓行に三十八年後の一九九〇年、「蝶と海」と題する短篇があって、安西の詩「春」の普遍的魅力の秘密をあますところなく解きあかしている。清岡卓行は、「二十世紀前半に現われた日本の詩人の中でだれからいちばん深く影響されたかと聞かれたら、私は萩原朔太郎と金子光晴の名前を挙げる。しかし、その時期のなんという詩作品がいちばん好きであるかと聞かれたら、それは安西冬衛の「春」と題した一行詩、「てふてふが一匹韃靼海峡を渡って行った」であると答えないわけにはいかない。」とこのエッセイ（随筆ではなく）に近い短篇を結んでいる。

清岡によると、この一行詩は片足を失った安西冬衛が大連で、一九二四年十一月からほぼ三年間、発行した「亜」を代表する最高の傑作であり、しかもこの時期は、満州事変あるいは張作霖爆殺事件以前であって、まだ支那（中国）との間に亀裂が意識されていない植民地的な生活地盤を想像させる稀有な背景をもっているということだ。つまり「亜」は口語短詩や散文詩への新鮮な感覚でモダニズム詩の先駆となったが、日本の租借地で国際都市、自

Hosei University Repository

由港、ヨーロッパふうの市街が中心の大連で発行されたことが象徴する独特にモダンな性格を示したことが重要なのだ。「凝縮された国際性、伝統的な短歌や俳句に通底する簡素さ、そして西欧の文学、とくにジュール・ルナールのある場合の詩的で簡潔な散文の影響、そうしたものが混然と融合していた」と清岡は「亜」を解説している。

さらに、この詩の初出は、「亜」第十九号（一九二六年五月）においてで、題名は同じく「春」でも、「てふてふが一匹間宮海峡を渡って行った」と内容が一部異る。しかもこの一行の真下に、「軍艦北門ノ砲塔ニテ」という小さな活字が空白を置いて書かれている。作者の視点を明確に示すためである。初稿と定稿とどちらがいいか、清岡は「百人の讀者のうち百人が定稿を断然いいとするだろう」として次のように記す。

> 間宮海峡と韃靼海峡ではこの場合、韃靼海峡という名称の方が遙かに奔放な抽象性を孕んで資的に一段と高い詩美をもつし、添書きによる軍艦の導入は、かえって詩の規模を小さくし、讀者の想像を狭苦しくさせよう。
>
> 定稿自体における決定的な魅力の一つを指摘するなら、「春」という季節における「てふてふが一匹」と「韃靼海峡」の鮮烈をきわめる対比である。若々しく可憐で孤独な生命の飛翔と、激浪か凪か、いずれにせよ国際関係の不安も漂わせて、いつ危難の移動を生じさせるかわからない自然。「てふてふ」という身近で優しい昆虫をアンティームにかたどる軽軽とした平仮名と、「韃靼」という古代東北アジアにおける野蛮あるいは武勇までロマンティックに連想させる重々しい漢字。そうした対照がいろいろと劇的な形で生じてこよう。

つけくわえる云葉もないほどみごとな読みである。

夕爾は俳句との出合いに觸れた文章（前掲、「春灯」に書いたもの）で「俳句の枠を横目にしてのびのびと体操される詩人岩佐さんの姿は、まことに颯爽と新しく私には感じられた。これは案外に青春の文学であるぞとその時思った」と俳句をはじめた中学時代を回想している。「俳句を如何に詩の如く書くか」は、したがって夕爾の持続した関心事であったことはまちがいない。しかし、安西の「春」がすぐれているのは、「詩を俳句のごとく如何に

Hosei University Repository

完璧に書くか」の試みが意識、無意識にかかわらず徹底してなされた上の成果だと私には思われるが、夕爾によるこうした指摘はなされていない。三年前の一九九三年、NHK教育テレビで「寒い遺産」と題して木下夕爾の人と詩が放映された際、ささやかれたのが「寒い遺産」と題する詩論の遺稿がみつかったとのことであった。さっそく心あたりの人にお尋ねし、NHKにも問い合せたが、みつからず、放映された内容にもそれについて觸れたところはなかった。したがって夕爾は俳句を〝寒い遺産〟と感じて対していたと勝手に想像するしかないが、〝寒い〟という云葉は夕爾においては比較的よく使われつねに〝生きがたさ〟のニュアンスがひそめられている。夕爾の俳句へのかかわりを視点を変えて見るために、夕爾の死の前後に夕爾の詩について書かれた、詩人以外の人の文章をみよう。

一つは、夕爾の俳句へのかかわりは、一極言すれば、俳句というまことに日本的なそして伝統的な詩型への、一時的避難であったのではなかろうか、あのきびしい思想と言論の弾圧下にあって、短歌とともに俳句の世界は他の文芸とくらべて比較的安全地帯にあったとも考えられるから」（清水凡平「木下夕爾小伝」）というもの。いま一つは、「夕爾氏（49）は若いころから現実の傍観者を心がけてきたのだが、戦中戦後はさすが傍観者をきめこむわけにはいかず、したがって詩もかけなかった。」（中国新聞1964・6・16）といった視点である。当時もその後も夕爾が闘っていたのは、いかに表すかの問題で、思想と行動、それを導くイデオロギーの問題ではなかったが、例外を除いてこの国の読み手はそれをけっして解さない。〝抒情詩などを作るより田を作れ〟という周囲の暗黙の眼の中で井伏鱒二の『厄除け詩集』に入れられている『東京行』（一九四九）は書かれた。終戦後四年を経た復興と食べることに懸命だった時期である。「それでも詩文学への想いは捨てきれなかったのでしょう。たまたま家の近くで開かれていた俳句の会に出たのが、俳句への出発でした」と兄、卓司氏は語っている。（前掲「木下夕爾小伝」）

前にもふれたが、夕爾は、句作において、たしかに〝俳句を詩のように書く〟ことからはじめ、多くの句集も読んでいる。虚子も例外ではなく「大野氏の著で戦前に三省堂から出た『現代の秀句』『高浜虚子』などを私はずいぶん愛讀した」（「福山雑記（1）」）と書き残している。しかし、俳句の俳句性をあくまで尊重したことは書き残した文章に散見するし、新興俳句に加わる人には異和を感じていたことは前項でふれた。俳句の師、久保田万太郎よ

Hosei University Repository

りも、文芸の師、人生の師として夕爾が私淑してやまなかった井伏鱒二は芭蕉を俳聖としてよりは、詩人と見、文芸の師としていたところがある。郷里への疎界生活をひきあげる際、夕爾たちとの別れの気持にもそれはあらわれて、「野ざらし紀行の芭蕉の気持ちだ」（木下夕爾「井伏鱒二先生のことども」）と小芭蕉をふるまってみせるのだ。この文章の中で夕爾は、「いつだったか先生（井伏鱒二）は某洋画家の福徳円満ぶりをたたえて、〈訪問の帰途ひとりでに笑いのこみ上げてくるような人柄だった。あんなふうになりたい〉ともらされたことがある。しかし私などは、いつもあまえた気持ちで、先生の一種とぼけたような、ユーモラスな雰囲気に、ついもたれかかろうとすることがしばしばあって恥じいらざるを得ないのである。」と往事をしのぶのだ。山本健吉が格調高く「正風の連衆（つれしゅう）とは、座の空気の純一な豊醇（ほうじゅん）さを醸（かも）し出すための情念の訓練に於て有資格者たるべき人たちであった。座の空気は人から人へ、自ら会得の微笑を以て感通し合うのであった。」と書いたが、井伏にとって夕爾はまさにこの正風俳諧の連衆の一人であり、その関係は生涯かわらなかった。山本健吉は、この正風俳諧を念頭において、俳諧という唱和応酬の文学の持つ性格を「俳諧は挨拶である」と言う。（『俳諧の心と方法』）詩においても小説においても、書き手と読み手の間に唱和応酬できる場が必要ではないかと考えるが、今はこのことにはふれない。それより夕爾が「この句に対しての私の戸惑いは、「理解」以前のもので、要するに自分には全然俳句がわかっていないのではないかという疑問につながる」（「福山雑記(1)」）とまで書く虚子の句についてさらに考察したい。

夕爾は虚子に直接会ってはいないが子規の弟子で秀れた俳人としての虚子の句を敬愛している。この点は他の俳人とかわらない。福山の俳句仲間と映画を見たことを語った文章をみよう。

映画「路傍の石」の中の、母親おれん、
一人息子吾一のすがたから、私は、

野を焼いてかへれば燈下母やさし

Hosei University Repository

という句を久しぶりに思い出した。大体大正の初期に生まれた人は、この映画に出てくる、古風な蒸気機関車、人力車、山間の分教場のような学校、筒袖に袴の小学生、――これらの風物をかなり身近かに思いうかべられるのである。「野を焼いて」の句もほぼ同じような環境を設定して作られたものであろう。最も抒情的な点でかねて私の愛誦するところである。（「福山雑記(1)」）

この文章はつづいて、〈独り淋しまわり燈篭にはひるべく〉の虚子の句をあげ、「私個人の感傷をいえば、大野氏の著に、〈まわり燈篭〉に関する詳しい文章はあっても、〈野焼〉の句に全然触れてない点で些か寂しい気持がした。」とある。これについで述べられているのが、（五月十四日。年尾、比古来る）の前書きのある〈山国の蝶を荒しと思わずや〉である。遇然にも安西の「てふてふ」と同じ昆虫の蝶が漢字で記されている句だ。前書きは、その句の出来た条件、そのような心の動きを示した現実を読み手に説明するもので、これがある場合、つづく句はそのような背景における作者の〈感情の鋒〉なのである。したがってこの虚子の句はあきらかに〈挨拶〉（山本健吉）であり、〈存問〉（虚子）と言うことになる。〝田舎者の私にもこの作、発表当時の俳壇的評判のほどが身にしみていた〟だけに常に一番目につくが、やはりこの句の評価には困惑を感じると夕爾は言う。

この句は眼前に飛ぶ山国の蝶を示して年尾、比古両人をねぎらうとともにそのよろこびを託した句だ。眼前のものを一見無雑作にとらえ、これを一句にすることは虚子の得意とするところだ。虚子の心は弾んでおり、自由無礙の風狂の態が認められる。眼前飛ぶは人もおそれぬげに飛ぶ蝶、四国の山々も、ようやく冬の固い装いを解いている。相逢う客と主人の心はこの蝶によって一つにほぐれてゆく。……

「虚子秀句鑑賞」の中には右のように書かれている。これ以上はないであろう。しかもなおこの句に対しての私にある戸惑いは「理解」以前のもので、要するに自分には全然俳句がわかっていないのではないかという疑問につながるのである。（傍点筆者）

（1959年7月「福山雑記(1)」）

Hosei University Repository

「理解」以前のものとは、おそらく他者に対する関係のもち方を指してのことと思われるが、私には、これを井伏鱒二の宅をはるばる訪ねた夕爾におきかえると、想像もつかないが、虚子ではわからないことはない。虚子ならいきおいよく飛ぶ蝶を指して、はるばる訪ねた客人に自らの壮健を示し、ホトトギス王国の繁栄を示したとも読めるからだ。夕爾はこうした虚子には詩人を感じられないのみか、生理的にも拒否反応がおきるのか。

虚子については多くの文献があり、死から三十年近くたった今もそれは書かれている。それも、とくに虚子に対しては敵視するかいまだに崇めまつるかの両極端の態度が目立つ。田辺聖子に杉田久女（虚子門下）を書いたノンフィクションに近い小説がある。この小説によって私は杉田久女の除籍のいきさつ、久女にとったその後の虚子の態度を知らされた。この小説はあくまで作者の推理として描かれた虚子像であるが、事実にもとづいていて田辺聖子の作家としての力量を感じさせる。

俳句雑誌「古志」代表の若い（一九五〇年生）長谷川櫂は、「田辺氏の本のなかには黒汁のような不気味な虚子がいる」という。

「虚子を勉強していると、ときどき不気味な虚子に出合う。久女の場合だけに限らない。虚子にとっては、俳句とホトトギス王国とどちらが大切だったのか。俳人だったのか、権力の妄者であったのか――そんな疑問が頭をもたげてくる。

余りにも現世的な姿の虚子。それはたいてい、暗くて大きくて、不敵な笑いを浮かべている。黒い虚子。こういう虚子はなかなか好きになれない」（『俳句の宇宙』）と。

しかし、長谷川は「俳人であったのか、権力の妄者であったのか、二者択一で割り切れないところに虚子のほんとうの難しさ、面白さがあることをも示す。「虚子のなかでは、よき俳句作家と冷酷な権力者とが、ただ表面上だけでなく、深いところで融合しているのではないだろうか。」と句をあげて解くのだ。

去年今年貫く棒の如きもの

Hosei University Repository

風生と死の話して涼しさよ
世の中を遊びごころや氷柱折る
紅梅の紅の通へる幹ならん
白牡丹といふといへども紅ほのか
春の山屍をうめて空しかり

夕爾はこれらの句をどう受けとめるだろうか。長谷川櫂は次のように読んでいる。

一句一句は、さまざまの対象をとらえ、さまざまの姿をとる。が、底の方に共通して読みとれるのは「力」である。その「力」は「棒の如きもの」から「遊びごゝろ」へ、性的な輝きから一輪の花へ、変幻をつづける。

この虚子の句の底にある「力」と同じ、「力」が、ときおり、虚子の実生活の上にも、たちあらわれてくるのではないか。そして、それは現世の悪の様相を帯びることもあるのだ。

虚子が、このような「力」の放恣を自分で抑えることはない。現世の善悪の色分けは、虚子にとって、あまり意味がない。善であろうと、悪であろうと「力」のおもむくままに、なるようになるだろう。虚子は、ただ、面白いと思って――「遊びごころ」で――眺め入る。それは、白牡丹の花であることもあれば、自分も含めた現実の人間模様であることもある。

虚子は、善悪を超越した、このような「力」を讃美し、信仰する。そしてその「力」に支えられた現実を肯定し、受容する。(『俳句の宇宙』)

政治学者・丸山真男は『古事記』の冒頭、宇宙創生神話の書き出しの部分に、日本人の歴史意識の「古層」を読みとったことはつとに知られている。日本人の歴史意識には、古代から現代にいたるまで、いきおいよく次々に生

Hosei University Repository

成するものへの讃美が「執拗な持続低音」となって鳴り響いている。そしてこの「古層」が勢力への讃美と現実への楽観――その裏側での価値判断の排除と客観主義の傾向を生んできたというのだ。この丸山氏の論考は日本人の歴史意識についてのものだが、丸山氏が指摘する「古層」は歴史意識だけに限らず、日本人の発想全体にあてはめてみることができると長谷川は述べ、「この考え方が、もっともよく当てはまるのが、ホトトギス王国であり、虚子の俳句であると思う」と話を展開する。

俳句という文芸の世界に、一時的ではあるが、なぜ「王国」と呼ばれるようなものが出現したのか。

虚子の唱えた「客観写生」があれほどの支持を集めたのは、なぜなのか。

丸山氏のいう「古層」は、このような疑問の解決にヒントを与えてくれる。

思うに虚子の「客観写生」は、虚子が自然や宇宙のもっている力＝「いきおい」を俳句の十七字の上に解放しようとした、そのことの裏側なのである。虚子は、今の現実を肯定し受容する。自然や宇宙のまっすぐな力を、人間の価値判断で汚すことなく、そのまま十七字にすくいとろうとする。そのための主観の排除が必要だった。それが「客観写生」ということだった。

その「客観写生」の表側にあるものを、虚子は「花鳥諷詠」と呼んだ。「花鳥風詠」とは、人間が自然や宇宙の「いきおい」と一体になって、その「いきおい」の表われである花や鳥など、さまざまな現象をほめたたえること。「葦芽の如く萌え騰る物」への讃歌のことだ。

長谷川櫂の指摘通り「ホトトギス王国とは、〈いきおい〉をたたえる虚子の俳句と俳句観の、子弟関係への自然な延長であり反映」なのであって、そうした背景を共有する時、〈山国の蝶を荒しと思わずや〉は虚子の秀句となるのだ。

「いきおい」よりは自然のかすかな音色を「価値判断の排除」より宇宙の真実のうながしに耳をすますことで単

Hosei University Repository

独者として思索しようとした夕爾が、〈山国の……〉の句に理解以前と言いきったのも当然である。

長谷川はさらに、「俳句を〈花鳥諷詠〉に限定しようとする虚子の考え方を評価するにしても、しないにしても、虚子にとっての〈花鳥諷詠〉とは古臭いことでも、ささいなことでもなく、偉大な花鳥をよむ偉大な作業であったことをまず押さえて、かからなければならないだろう。〈花鳥諷詠〉もその裏側の〈客観写生〉も、虚子は〈津波の如く常に身辺に押し寄せつゝある〉宇宙のエネルギーという〝場〟で唱えたのだ。」と述べ、虚子の句を宇宙とともにある思想としての「花鳥諷詠」とみなし、「虚子は、〈花鳥諷詠詩〉としての俳句を、地球文化全体のなかでも堂々と通用すると考えていたようだ」と推察する。

句の中に句の詩魂を見出すのが詩人であり、そのかぎりでは、詩魂は俳人よりも孤独な挑戦者である詩人のものであることを夕爾の「理解以前」という拒否の言葉は示している。安西冬衛の詩「春」はいうまでもない。